

Title	一般化と特殊化：名詞、動詞と名詞変換動詞の意味
Sub Title	Generalization and specialization : the meaning of noun; verb and denominal verb
Author	並川, 千恵(Namikawa, Chie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.211(44)- 225(30)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0225">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0225</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 一般化と特殊化

——名詞、動詞と名詞変換動詞の意味——

並川千恵

## 1. 序論

英語には数多く、文中でいろいろな機能を果たす語彙形式<sup>1)</sup>がある。つまり、一つの語彙形式が複数の語彙範疇に属することが多い、ということである。この結果として、例えばあるものは形容詞であると同時に副詞であり (e. g. *clear, quick*), またあるものは名詞でありかつ動詞である (e. g. *love, walk*)。また他のものは名詞であると同時に形容詞である (e. g. *back, total*) など他にもいろいろなパターンがある。そのような場合にはもちろん、そういった語彙形式はそれらが文中で果たす役割によって違う意味をもつことになる。言い換えると、違う語彙範疇に属することで、複数の意味をもつことになるのである。しかし考えてみると、一つの語彙形式がたった一つの意味しかもたない、というほうがまれである。たとえある語彙形式が一つの語彙範疇にしか属していないとしても、それは大抵複数の意味をもつ。その場合これらのいくつかの意味は互いに関連していると思われる。もしそれらの意味の間になにも関連がないとしたらそれらは一つの語がもっている意味ではなく、いくつか複数の語がもつ意味であると考えられ、その語彙形式は homonym<sup>2)</sup> であると言われるであろう。意味が関連している場合その関連の仕方はその形式によって、様々であるように見える。しかし、複数の意味のなかで一つの中心的で重要な意味が存在する、というのは大抵どの語にも言えることであろう。その意味は同時に、その語が発せられるのを聞いたとき我々がまず最初に思いつく意味でもある。そしてまたその意味はそこから他の意味が発達するみなもとでもあると考

えられる。

ここではある語彙がはじめとは違う語彙範疇のメンバーとなるとき、もとの意味と新しい意味とのあいだの関係、そして違いをみていきたいと思う。この場合、その語彙形式は二つの語彙範疇の間の境界をこえることになるわけであるが、意味が拡張する様相は一つの範疇内で意味が広がるときと、それほど変わらないのではないかと思う。というのは、たとえ境界をこえるとしてもそこでまるで新しい無関係な意味があらわれるということは考えられないし、同じ範疇内でだんだん意味が変わっていく場合それは自然にそうなのであり、よってこのような変化の仕方が最も自然だからである。もしそうでなければ同じ語彙形式をもつ意味がなくなるであろう。そしてまた、意味間関係を観察することによって、その語彙形式が属する語彙範疇全体の性質を探ることにする。しかし、ここでは全ての種類を見ることはできないので、名詞と動詞の関係だけを探りたいと思う。というのはこの二つの語彙範疇は全ての語彙範疇のなかで中心的であり、不可欠のものだと思われるし、同時にこの二つの範疇にまたがる語彙形式の数も多いからである。

## 2. 語彙範疇の変化の方法

上で述べたように、ここでは一つの語彙形式が名詞と動詞として使われる場合を調べるが、注意しなくてはならないのはこの範疇変化には二つのパターンがある、ということである。まず一つは名詞が動詞として使われるようになった場合であり、もう一つは動詞が名詞として使われるようになった場合である。これ以降、最初のパターンを名詞転換動詞(denominial verb)と呼び、二番目のパターンを動詞転換名詞(deverbal noun)と呼ぶことにする。またここには派生接辞を用いる範疇の変化は含まない。

動詞転換名詞の場合、元の動詞は「動き」を表すが、結果として生まれる名詞はその「動き」を抽象的な「出来事」としてとらえて表す場合が多い。*Approach, glance, smile* といった例をみればわかるであろう。これらは形態が変化しない場合であるが、変化する場合を考えると、動詞を

名詞にかえる派生形態素 (derivational morpheme) は数多くある (e. g. *-ness, -tion, -ment*)。そしてこれらの形態素自体意味を持っているので、これらが元のかたちに加えられたとき出来上がった名詞の意味はその形態素の意味から推測されうる。例えば *-er(or -or)* が動詞に付け加えられることにより、‘もとの動詞によって表される「動き」を行なう人あるいは道具’ という意味が大抵の場合加わることになる。このように、動詞を名詞にかえる派生形態素が発達しているため、形態的に無変化である動詞転換名詞は名詞に変える、という働きにおいてそれほど重要な役割を果たしていないようにみえる。

他方、名詞を動詞に変える派生形態素はあまりない (e. g. *en-, -en*)。それゆえ名詞から動詞をつくるという点で語彙目録 (lexicon) 全体を考えると、名詞変換動詞は非常に重要な役割を果たしていることがわかる。

なぜこのように形態素の数に差がでるかについてであるが、元来名詞は具体物を表すことが多く、動詞は出来事といった抽象的なことを表すことが多いという明らかな意味的違いが関連していると思う。Hopper and Thompson (1984) はこの事に関して Lakoff and Johnson (1980) の‘存在のメタファー’<sup>3)</sup> の考えを利用して述べているが、まとめると次のようになる。動詞から名詞への変化は抽象を具体のように扱うということで、メタファーのプロセスといえる。というのは人間認知は具体物のほうが扱いやすいからである。よってこれに対しては言語は名詞化プロセス、つまり動詞転換形態素 (deverbal morpheme) をもつが名詞から動詞への変化は人間の認知的傾向に反するため、動詞化プロセスつまり名詞変換形態素 (denominal morpheme) はもたない。

一方形態素が付かない変化の場合逆に名詞変換動詞は動詞変換名詞より数が多く、重要な役割を果たしている。これは名詞変換形態素が少ないため、穴埋めという意味で多くなっているのかもしれないが、これだけのためではないと思う。まず名詞から動詞になる場合の意味変化を考えてみることにする。元の名詞の意味を見てみると、殆ど具体物を表していることがわかる。そこからどう動詞の意味にかわるかであるが、その名詞の指示

対象の機能が大きく関わっている。つまりその具体物がどのように使われるか、などが問題となる。例えば道具を表す名詞であったら動詞の意味は‘その道具を使って一番自然と思われるような行為をする’といったようになるであろう。例えば元の名詞が *knife* であったらそこから生まれる動詞は‘*knife* を使って切る’といった意味になる。また人を表す名詞が動詞化するのであれば、‘その人が普通するようなことをする’というのがもっとも自然にうかぶ意味であり、そこから意味が発展すると考えるのは自然であるが、他の種類の意味が名詞から直接うまれるということはありません（下記の例を参照）。このように名詞転換動詞の（中心的）意味は自然に決まってくる傾向があると思われる。

これに対し、動詞転換名詞の意味は例えば *walk* 歩く→歩行, *love* 愛する→愛, といったように抽象名詞うみだすことが多い。これは先程述べたように人間の認知の傾向に反するプロセスであるので、この方向の変化は名詞から動詞の変化ほど進まなかったであろう。以上のような理由から名詞転換動詞と動詞転換名詞の数、頻度そして語彙目録全体を考慮した際の重要性の違いがうまれるのであると思われる。

### 3. 名詞転換動詞の分析

ではここで実際にいくつか名詞転換動詞の例を挙げて意味の変化を探ってみることにする。まず一見してわかりやすい例を挙げてみよう。ここでは名詞転換動詞として使われている意味だけをあげる。

1. (1) *pilot* : to act as a *pilot* of sth.<sup>4)</sup>
- (2) *fiddle* : to play the *violin*.
- (3) *hammer* : to hit or beat sth with a *hammer*.

上の例において引用されている意味は必ずしもその動詞の唯一の意味ではない。しかしそれは最も頻繁に用いられる意味であり、その動詞の中心的な意味である。さらに重要なことはその意味は我々がその語が発せられ

るのを聞いたときまず最初に思いつく意味である、ということである。なぜならこれらの意味はもとの名詞の指示対象のもっともよく知られた機能から生まれているからである。つまり、その意味は我々の認知、直感にかなった、最も自然な意味であるということになる。それゆえ、たとえ我々がある名詞変換動詞の意味を知らなかったとしても、もし元の名詞の意味を知っているならば、その意味を推測することができる。

しかし問題はそれほど単純に割り切れるものではない。名詞変換動詞はたとえ始めは元の名詞が指す物の最も重要な機能に関連した意味をもったとしても、それだけにとどまらず、大抵の場合、その他の関連した意味を発達させられるからである。Clark and Clark (1979) は ‘innovative denominal verb’ と ‘well established verb’ という二種類を区別している。前者はまだ名詞であるという印象が抜けきってないものですべての人に動詞である、と直感的に感じられないものである。またこれらはイディオム化された意味をまだもたないものである (e. g. *sack*, *knee*, *auther*)。またこれらの中にはかなり偶発的でそれが使われ始めた時点では一般に受け入れられていなく口語的であったものもあると思われる。そして後者は動詞として確立したもので、意味もある程度、名詞から直接推測される意味から発展しており、上の例のように単純に言い換えができるというわけにはいかないものである (e. g. *land*, *ape*, *man*)。Clark and Clark はこれら二種類の動詞は連続体の両端をなすものだ、と述べている。名詞転換動詞は普通、始め動詞として使われだしたところには ‘innovative’ であったものが徐々に ‘well established’ へと変わっていくと思われるので、例に挙げた意味はもともとの名詞の意味と直結しているので、まだ ‘innovative’ の段階にあると思われる。言い換えると、先程から述べているように、 ‘innovative meaning’ は自然で元の名詞から我々が最初に思いつく意味である。このように名詞から名詞変換動詞への意味拡大は、一つの語彙範疇内で意味が広がるときとさほどかわらないようにみえる。このように考えると、まず始めに生まれた動詞の基本となる意味からは色々な意味が発展しているようである。ここでまず、基本的な意味で使われて

(34)

いる例を見てみることにする。

2. (1) his fingers *sheltered* themselves (Bronte, E 1847)<sup>5)</sup>
- (2) she kept *fanning* herself (Carroll, L 1865)

(1)では‘隠れ家’が‘隠れる’という意味に、(2)では‘扇’が‘扇であおぐ’という意味になっているが、名詞の指示対象がもつイメージそしてそれが果たす機能がわかれば動詞の意味は自然と浮かんでくるのがわかる。では次に 1. (1) のように元の名詞が人を表すものを挙げる。

3. (1) *umpire* : to act as umpire in <*umpire* a match, dispute><sup>6)</sup>.
- (2) *captain* : to be *captain* of (a football team etc.) <Who is *captaining* the side today?>.
- (3) *maid* : to serve as maid.
- (4) *apprentice* : to set at work as an apprentice <at the age of sixteen he was *apprenticed* to a blacksmith>.

上の例に共通しているのは、これらの動詞が‘innovative verb’であると思われる点である。これらは殆ど上の意味のみで使われる。それゆえこれらはまだ動詞として使われ慣れていなく、基本的意味しかもっていないと思われる。実際我々はこれらの語が動詞として使われているのに出くわすことはあまりない。しかし我々はこれらの元の名詞の意味を知っているので、動詞が何を表すか想像できる。こうしてみると、全ての人を表す名詞は動詞として機能する可能性をもっていることになる。実際名詞すべてに対応する名詞転換動詞があったらかなり語彙が煩雑になるであろうと思われる。なぜなら既存の動詞と意味がぶつかる可能性があるからである。しかしたとえ一度動詞として使われても、必要のないものは淘汰されるであろうし、残って意味を発展させるものはその必要性があるからそうなるのであろう。ここでも使う者の意志が反映されているのである。いずれにせ

よ、ある名詞が動詞の機能を果たしているのを見たとき、それが偶発的なものでなく、完全な動詞であるかどうかの判断は難しい。大抵のものは少なくともはじめは口語的に聞こえてしまうからである。しかし3についていえることは、ここでの名詞転換動詞の意味は概して‘元の名詞によって指される種類の人が普通することをする’ というようになるということである。

次に他の例を見てみよう。

4. (1) *queen* : (a) to behave in a queenly manner <Since her promotion, she *queens* it over everyone else in the office>, (b) to rain as queen.<sup>7)</sup>
- (2) *boss* : (a) to act as a chief workman, (b) to exercise control or authority over <He's always *bossing* his wife about>.
- (3) *tutor* : (a) to act as a tutor, (b) to control oneself or one's feelings <*tutor* oneself to be patient>.

上の例で、名詞転換動詞の各々の意味が元の意味から発達していることがわかるが、その意味も我々は抵抗なく受け入れることができる。というのはそれらの意味が元の名詞のイメージと直結しているからである。例えば(1) *queen* は‘ある国家において権力をもつ人’であるが、上の例文から明らかのように名詞転換動詞は‘国家’という領域だけでなく、色々な領域で使われうる、ということがわかるであろう。*Queen* の《power image》はそれがどのような領域で使われようともそのまま残るのである。他の例についても領域に関する制約はほぼなくなっている、と考えてよく我々はかなり自由にその名詞転換動詞を使うことができる。各々について考えてみると、(2) *boss* は《control image》を核に意味が発展している。(3) *tutor* の (b) の意味は名詞 *tutor* の意味と直接むすびつきはしないが、《direction image》から発展している。こういったことから、イメージ、

(36)

言い換えると人間の認知は名詞転換動詞の意味が広がるさいに重要な役割を果たすことがわかった。以上のものは比較的単純で、直接的な拡張であった。それではさらに例を見てみよう。

5. (1) *master* : (a) to gain control of something, (b) to gain considerable knowledge of or skill in something <She has fully *mastered* the technique<sup>8)</sup>>.
- (2) *guard* : (a) to keep safe from danger etc., protect <a woman who jealously *guarded* the treasure>, (b) to watch over and prevent him from escaping, (c) to use care and caution to prevent something <*guard* against disease>.

この二例をみてまず感じられることは、例3, 4に比べ一見して動詞であると思われる確立が高いであろう、ということである。意味を見てみると(1)では名詞がもっていた意味と関連していることは歴然としてはいるが、名詞の幾つもの意味 (e. g. かしら, 先生, 主人, 達人 etc.) 各々のもっていた特殊性が失われ、色々な対象に対し使われるようになってきている。つまり、上で述べたように名詞のもっていた領域に関する制限がなくなっているのである。(2)では元の名詞の指示対象が人である場合の意味は‘護衛者, 守衛, 監視者’などであるが動詞になると単に‘見張る’ということで、それが仕事である、といった制限はない。

つまり共通して言えることは、名詞転換動詞の意味に関して、元の名詞の特殊化された意味が消え(あるいはそこから他の意味が発達し)、その動詞はどの領域で使われるか選ぶ自由を得るようになる、ということである。

#### 4. その他の例と問題点

今まで元の名詞が人を表す場合を中心に調べてきたが、そこでだされた

一般化が他の名詞転換動詞にもあてはまるか、見てみることにする。

6. (1) *shoulder* : (a) to put sth on one's shoulder, (b) to take guilt, responsibility etc. upon oneself <*shoulder the* <sup>9)</sup> duties of chairman>, (c) to push with one's shoulder.
- (2) *bottle* : (a) to put sth into bottles, (b) not to allow (emotions) to be seen, restrain or suppress (feelings) <they *bottle* up all their anger and resentment>.
- (3) *head* : (a) to be at the front or top of <*head* a procession>, (b) to be in charge of or lead <*head* a rebellion>, (c) to give a heading to <The chapter is *headed* 'My Early Life'>, (d) to move in the specified direction <Where are you *heading*?>.
- (4) *face* : (a) to have or turn the face towards <The window *faces* the street>, (b) to meet sb/sth confidently or defiantly without trying to avoid <*face* dangers>, (c) to require the attention of, confront <the problem that *faces* the Government>.

順番に見ていくと、まず(1)の *shoulder* で(b)は比喩的な意味であり、意味が一般化した、というのとは少し異なるが、実際に '肩にのせる' といった制限が緩くなり、異なる領域でも用いられるようになる、という点では一致している。(2)でも(b)は比喩的な意味であるが、精神的なものも対象になる、という点で意味の拡がりが見られる。(3)では色々な意味が発展しているが、全て《先頭にある》というイメージに貫かれて、関連していることがよくわかる。*Head* は名詞も非常に多義であるが、それぞれの意味が指示する対象にとらわれず、動詞では用いられる対象が広がっている。*Face* でも(b), (c)において、単なる '顔' から《前面にある》というイメージののっとして、意味が広がっている。

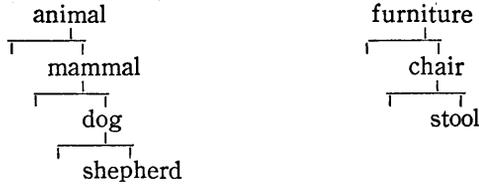
このように名詞が名詞転換動詞となり、使われて意味が発展していくうちに、名詞のもっていた意味の特殊性を失い広い領域で用いられるようになる、ということがわかった。しかし、全ての名詞変換動詞が同じような速度で、同じような意味変化を遂げるか、というと、そうではない。先程述べたように、動詞として確立するものもあれば、一回限りで消えてしまうものもあるであろうし、たとえ動詞として認められようとも、それまでに長い時間がかかるものもあるであろう。また名詞として馴染み深いからといって動詞になってよく使われるとも限らない。たとえば *tutor* は動詞として確立しているが、*teacher* は動詞として辞書にエントリーしていることはまずない。この場合 *teach* という動詞が *teacher* の名詞転換動詞をブロックしていると思われる。また同等の立場であっても、*brother* のほうが *sister* より‘兄弟’という意味に関して動詞として使われることが多い、といった不均衡もある。こういった差はその名詞のもつイメージの微妙なニュアンスの差に関わるものと思われる。また例えば、*book* の動詞は予想されるような‘本を読む’でなく、‘記帳する、予約する’といった意味が中心となる。これは先程述べた意味の一般化に反する例、といえるかもしれないが、これも‘本を読む’という意味は *read* という動詞によりブロックされたのではないかと推測される。

このように名詞転換動詞も必ずしも予想どおりにはいかないこともあるか、つぎに名詞、動詞というカテゴリー全体を見ることにより、先程の一般的な法則の有効性をサポートしてみたい。

## 5. 名詞と動詞の関係

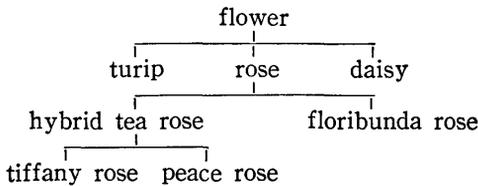
ここでは名詞転換動詞、といったことにとらわれず、広く語彙目録全体を考えてみることにする。名詞、動詞というカテゴリー全体をみると名詞は特殊化の傾向をたどり、動詞は一般化の傾向をもっているように見えるのである。語彙目録全体の構造を考えてみると、名詞は次のような階層構造をもつことが多いようである。

fig. 1



この例では使われている語彙形式は基本的なものばかりで最も下位の語彙形式であっても我々はすぐにその指示対象を思い浮かべることができるだろう。上のような階層構造はいろいろな分野で発明や発見があって、物に命名が行なわれる、といったことがおこるため次々下方に広がっていくものである。例えば fig. 2<sup>10)</sup>を見てみよう。

fig. 2



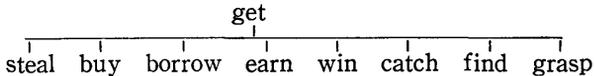
ここで最上位の *flower* が basic level であるということからもわかるように、最下位である *peace rose* という名を見ても、すぐにその指示対象を思い浮かべうる人は少ないであろう。これも新種の発見により新しい命名が行なわれた例であり、さらに研究が進めばもっと上のような階層が下方に広がりうる。つまり新しい名詞がでてくることはごく自然な成り行きである。それに対し、この fig. 2 で *flower* の上を考えると、既存の語である *plant* などが思い浮かぶが、この語と *flower* の関係は部分と全体という関係であり、少し上下関係 (hyponymy) とは違ってしまふ。それ以外で上位語 (superordinate) は考えられないし、現に存在していないであろう。そして、これから更に上方に総括的語彙がうまれるとは考えがたい。つまり名詞は一般化された意味をもつ語彙を得ることはあまりないが、特殊化された意味を持つ語彙を増やしがちな、ということがわかる。このよ

(40)

うに、特殊化の傾向は名詞全体にあてはまるものである、と思われる。

一方、動詞全体を考えてみると、頻繁に使われる動詞というのは意味があまり特殊化されていないことがわかる。例えば、*make, take, give, have, use* といったものはそれ自体では特殊化された意味をもってはならず、使われる領域に制限もないため、意味的に不整合でない限り大抵どのような名詞もその目的語としてとり、それを選ぶ際に制限は殆どない。これに加え、動詞は名詞ほど階層構造をもたないように見える。例えば‘あるやり方で何かを言う’ということを表したいとすると、*speak, talk, tell, say, mention, whisper* などいくつかの動詞があるが、これらはすべて同等のもので、ある語の共通の下位語となると思われる。しかしこれらの上位語というものは存在しなく、またこれら自身もその下位語をもたない。もし‘何かを言う’ということに関して、より特殊化された要素を表したいなら、動詞とともに副詞を使うであろうし、従って意味的に特殊化された新たな動詞を生み出すということはあまりない。しかしまったく語彙間の階層関係がないわけではない。次の例は動詞の階層関係を表す。

fig. 3



しかしここでも *speak* などの時と同様さらに細かい意味が付け加えられるときには副詞が多用され、新たな動詞が付け加えられるということはあまりない。名詞のところでは新たな発明、発見などにより特殊化された意味をもつ語が増えると述べたが、これは名詞と動詞の大きな違いであるが、動詞においてはそのように新しい発明、発見により語彙が増えるというようなことは考えがたい。このように動詞は名詞のようにはっきりした階層を形成しないし、意味が特殊化することもない。

まとめると、名詞は特殊化した意味をもつ語彙を増やす傾向にあるが、動詞はそのようなことはなく一般的な意味にとどまりがちである、ということがいえる。このことは先程見てきた名詞転換動詞の意味変化の傾向と

共通するものがある。名詞転換動詞は名詞が動詞にかわると、名詞のもっていた特殊性を失い、一般化する傾向にあるからである。つまり、逆に言うると名詞転換動詞のこの意味変化の傾向は名詞、動詞というカテゴリー全体の性質を代表しているのである。

## 6. 結 論

英語は日本語と違い、語彙形式の形でなく、それが位置する文中の場所によってその働きがきまる。そのため形によって語彙範疇の区別をする必要がないため、同じ語彙形式が同時に複数の範疇に属する、ということがおこるわけである。このことは一見区別がつきにくく、混乱を生じるように思われるかもしれないが、一つの語彙形式がたった一つの語彙範疇にしかな属さないことが常識であるわけではないし、それを必要とする人間の認知傾向にそぐって変化してきたため、人間は本能的にそれがどの範疇に属するか判断できると思われる。

名詞変換動詞では元の名詞の指示対象の性質、機能を知っていれば動詞として使われていてもその意味は大抵一見してわかる。そしてたとえ意味が一般化したとしても、同じイメージによって貫かれているため、不自然な意味であるとは感じないであろう。名詞転換動詞は例えば‘絵を描く’という意味を表したい場合、それまで *draw a picture* と言っていたものが *picture* という一言ですむ、という具合に非常にエコノミカルな表現であることもそれが生まれる理由であろう。また子供はよく間違えて動詞として使われない名詞も動詞として使ってしまうといわれるが、この事実も名詞転換動詞がいかにか人間の認知活動にかなったものであるか、ということを表していると思う。このように名詞転換動詞の形成は非常に自然な成り行きであり、これからも無限に増える可能性があり、使われることにより意味が一般化し、動詞として確立するものも多く見られることであろう。

## 註

- 1) この論文では‘語’という代わりに‘語彙形式’という表現を使う。なぜならそれは中立的な表現であり、語彙範疇をきこせず使うことができると思われるからである。
- 2) ここでは同綴同音意義語のことを指し、同音意義語は含まない。
- 3) 「出来事、行為、状態」などを比喩的に物としてとらえる考え。
- 4) この論文中の例はすべて、Webster's third New International dictionary (1986) または Oxford Advanced Learner's Dictionary 4th ed. (1989) からの引用である。また、以下に掲げた例語について参考のため、その名詞(それが人を表す場合はその意味で)が最初に使われた年と動詞としての初出年をあげることにする。(Oxford English Dictionary 2nd ed. 1988 より)  
*pilot*—名詞 1530, 動詞 1693, *fiddle*—名詞 1205, 動詞 1377,  
*hammer*—名詞 1000, 動詞 1430
- 5) Emily Bronte, *Wuthering Heights*.  
Lewis Carroll. *Alice's Adventures in Wonderland*.  
*shelter*—名詞 1585, 動詞 1590, *fan*—名詞 800, 動詞 1000
- 6) *umpire*—名詞 1400, 動詞 1592, *captain*—名詞 1380, 動詞 1598,  
*maid*—名詞 1390, 動詞 1900, *apprentice*—名詞 1362, 動詞 1631
- 7) *queen*—名詞 825, 動詞 1611, *boss*—名詞 1649, 動詞 1856,  
*tutor*—名詞 1377, 動詞 1592
- 8) *master*—名詞 1000, 動詞 1225, *guard*—名詞 1412, 動詞 1583
- 9) *shoulder*—名詞 700, 動詞 1300, *bottle*—名詞 1375, 動詞 1641,  
*head*—名詞 825, 動詞 1300, *face*—名詞 1290, 動詞 1440
- 10) 大修館英語学事典 (1983)

## 参考文献

- Adamas, V. (1973). *An Introduction to Modern English Word Formation*  
London: Longman.
- Aronoff, M. (1980). Contextuals. *Language* 56-4, 744-58.
- Clark, E. V. and Clark, H. H. (1979). When Noun Surfaces as Verbs.  
*Language* 55, 767-811.
- Givon, T. (1984). *Syntax: A Functional-typological Introduction, I*.  
Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, P. J. and Thompson, S. A. (1984). The Discourse Basis for Lexical  
Categories in Universal Grammar. *Language* 60-4, 703-52.
- and —. (1985). The Iconicity of the Universal Categories 'noun' and  
'verb'. In Haiman. (1985). 151-83.

- 井上和子編. (1985). 現代の英文法 6 名詞. 東京: 大修館書店
- Jespersen, O. (1942). *A Modern English Grammar of Historical Principles VI, Morphology*. Copenhagen: Ejnarumnskaard.
- Kruisinga, E. (1932). *A Handbook of Present-day English, II English Accidence and Syntax, 3*. Groningen: P. Noordhoff.
- Lakoff, G. (1987). *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Marchand, H. (1960). *The Categories and Types of Present-day English Word-formation*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Taylor, J. R. (1989). *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press.